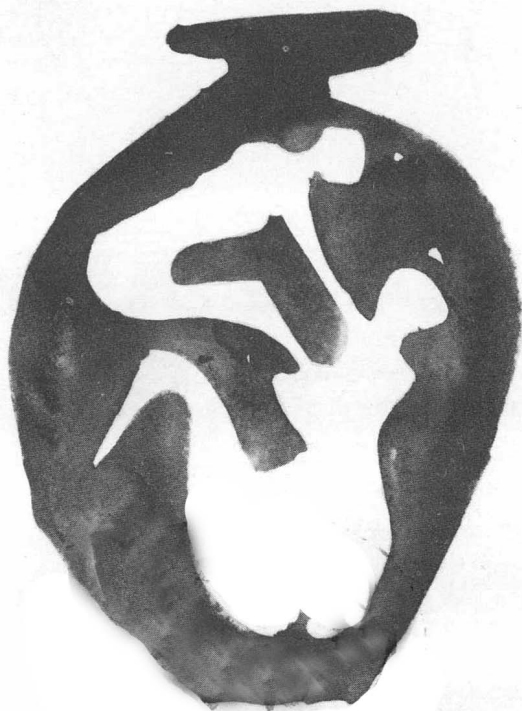


さよならの

値打ちもない

さよならの
値打ちもない



浪速書房刊

さよならの値打ちもない

左保

昭和四十三年五月十日発行

定価 四八〇円

著者 笹沢左保

発行者 角谷徳雄

発行所 浪速書房株式会社

東京都千代田区
三崎町二丁目十二番二
振替東京 一二八四〇

・落丁・乱丁本はお取り替え致します。

目次

第一章	無の感触	五
第二章	愛の感触	三
第三章	死の感触	三〇
第四章	陰の感触	一八
第五章	終の感触	三六

装
幀

土
井

榮

さよならの値打ちもない

第一章 無の感觸

1

形ばかりの葬儀であつた。

本来ならば、青山斎場あたりで盛大にとり行なうべきであつただろう。丸甲毛織社長令嬢の葬儀である。そのくらいのことをして、決して分不相応とはいわれないはずだつた。

しかし、事情が事情であつた。澄江は変死したのである。病死ならともかく、殺されたとなるとその葬儀も世間の手前、控え目にするのが、常識というものだつた。

それに、澄江が死んだのは三か月も前のことである。その上、澄江が不慮の死を遂げたのは日本国内ではなかつた。スペインの首都マドリード郊外で、殺されたのであつた。

澄江が殺されたという記事は、日本の新聞にも載つた。二、三の週刊誌が、澄江の死にまつわる謎を追う形で特集記事を書いた。最近の海外旅行ブームで、気軽に行つては外国で良識に欠けた行動をとる旅行者が多くなつた。そのことに對する警告でもあつた。

いずれにせよ、澄江の葬儀を簡略に行なわなければならなかつた幾つかの条件があつたわけであ

る。葬儀そのものを取りやめようと、澄江の父親が主張したくらいであった。

しかし、丸甲毛織の重役たちが承服しなかった。社長の肉親の葬儀が行なわれなかったとなると、変なふうに誤解されて会社の信用に関わる恐れがあるというのだった。

その結果、死後三か月たってからの告別式という風変わりな葬儀がとり行なわれることになったのである。場所は東京芝高輪にある町田甲太郎社長の自宅、日時は七月二十七日午後二時からであった。

朝から暑い日だった。午後になると、三十度を越した。重そうに枝を垂れて、緑濃い樹木までが生氣を失っていた。広い庭へ集まって来る蟬さえも、鳴りをひそめていた。

それにも関わらず、焼香者の訪問は引きも切らなかった。丸甲毛織の関係者が殆どだったが、町田甲太郎と個人的に付き合ひのあるという人も多かった。生前の澄江の友人、知り合いも決して少なくはなかった。町田甲太郎は各界に顔が広いし、澄江もよく人の面倒を見るほうだったから、当然のことかもしれない。

しかし、そうした人々にいちいち通知を出したわけではなかった。では、なぜ彼らは今日澄江の葬儀があることを知ったのか。それは、新聞のせいであった。

ある新聞が、街の話題を拾う小さな欄で澄江の葬儀が行なわれることを紹介したのである。死後三か月の葬儀というもの珍しさと、その新聞がかつて澄江が殺された事件をかなり大きく扱ったことからであった。その新聞を見てという参列者が、何人もいた。三時すぎに激しい雷雨があり、一旦参列客の足がと絶えた。しかし、四時半ごろから再び町田家の門をくぐる人の姿が多くなった。

二時から何時までとはっきり時間を区切ってなかったし、途中で雷雨に見舞われたりして葬儀は予

想外に長引いてしまった。それほど多数の人は来ないだろうという誤算も、だらだらした葬儀になった一因であった。

玄関の前に設けた受付を取り片づけたのは、七時半だった。夏の長い夕暮れも、ようやく夜の闇の中に去ろうとしていた。家の中に流れ続けていた主僧從僧三人の説経の声も消えた。

町田邸内には丸甲毛織の幹部たち、世話人連中、それに親戚一同だけが残った。これから酒であった。今夜は明け方まで、通夜代わりの酒席になるに違いなかった。

五味川大作は、町田甲太郎夫婦と三人で応接間へ引き揚げて来た。今日のような日は、客を接待するための部屋である応接間が、憩いの場になるものだった。

それに、何よりもまず椅子にすわりたかったのである。澄江の夫五味川大作は喪主として、町田甲太郎夫婦とともに五時間以上も、祭壇の脇に正座していなければならなかったのだ。

、こうも洋間を恋しく思ったことは、これまでになかった。夫婦はソファに、五味川大作はアーム・チェアに腰を沈めながら、いい合わせたようにほっと溜息をついた。

三人はそのまま、しばらく無言でいた。口が重いのは、疲れたせいばかりではない。葬儀をすませたことによって、絵空事のように考えていた澄江の死に実感が湧いたのである。

澄江が死んでから三か月たっているということ自体、まだ信じられなかった。いまにもこの応接間へ、華やかな笑顔で入って来そうな気がする。

銀色のガス・ストーブが納まっているマントルピース、マントルピースの上の装飾時計、壁にかかっている港町風景を描いた十号の額絵、床に敷いてある熊の毛皮、クリーム色のピアノ、やや傾きかげんのシャンデリアと四か月前生きている澄江と談笑を交したころの応接間と何一つ変わっていない

のだ。

応接間だけではない。この家全体が、まったく変化していないのである。それでいて、この家の中に当然いなければならないはずの澄江だけが、永久に姿を現わさないことになっている。

馬鹿げた話だと思いたくなる。まるで、母親もいないのに子供だけが生まれて来たみたいで、容易には合点がいかない。死んだという知らせは耳に入っても、事実として把握できないのだ。

それは、三人とも澄江の遺体に接していないからかもしれない。事は外国で起こり、死んだ顔も確かめていない。知らないうちに事態が進展して、遠いところで一つの結論を出されて、そのまま認める気にならないのと同じである。

別にいる時よりも、澄江と一緒にいた時間のほうがはるかに長い。そんな人間に、澄江がもうこの世に存在していないということを、簡単に信じ込ませようとするほうが無理かもしれない。

しかし、それも昨日までの話であった。今日こそ、澄江の死を胸の奥でじつくりと噛みしめた三人だった。半日読経を耳にして多くの人々の悔みの言葉に頭を垂れていれば、自分の最も身近な人間が死んだのだと思わざるを得なくなる。

だからといって、今更泣いたりはいらない。心の準備だけは、とくにでき上がっている。ただ、事は終わったと緊張感から解放されて、あとに残ったのは虚脱だけである。

五味川大作と町田甲太郎は一応礼装を解き、甲太郎の妻絹代も紋付きの喪服を脱いで夏ものの普段着に着替えている。だが、それで気持ちまで寛ぐというわけにはいかなかった。

着替えをしたのは礼服が汗にまみれてしまったからで、とてもそんなことで心の重苦しさから逃れられるはずもなかった。現在は実際的なことで行動するだけで、感情を大切にするというところまで

はいつてなかった。

静かであった。急に静かになったことが、一つの人生の終息というものを痛いほど感じさせる。奥の座敷から、たまに笑い声が聞こえて来るだけだった。

十畳と八畳の境の襖を取り払った座敷では、すでに酒が始まっている。最初のうちはしめやかに、やがては陽気になるだろう。まだ、そのしめやかな雰囲気の間隙であった。

応接間では、一台の扇風機の回転音が生きているだけだった。三人は互いに、この三か月間澄江の死について努めて触れないようにして来た。だが、もうそうはいかないのである。そう考えて、口を開くのが怖くなつての沈黙であった。

「とにかく、ご苦労さま」

甲太郎が、思い出したようにいった。痰がからんでいるような、しゃがれた声であった。他人に弱味を見せることを何よりも嫌った矍鑠たる丸甲毛織社長の面影は、まったく認められなかった。

一人息子を二年前に交通事故で死なせ、今度は一人娘の澄江を異国の地で失った。六十五歳の甲太郎にとっては、両手両足をもがれたような衝撃にも等しいだろう。

もう十年も前から、黒いところは残っていない銀髪であった。それがむしろ、普段の甲太郎を若々しく見せた。だが、いまは逆にその銀髪が彼を妙に老人臭くしていた。

「いや、どうも。最初から少しも役に立たなくて……」

五味川大作は口元だけではなく、自分の不甲斐なさに恐縮していた。そもそも自分が健康でさえあれば、このような事態には至らなかつたのだと思う。

五味川が澄江と結婚したのは五年前、彼はまだ三十歳であった。当時の五味川大作は、丸甲毛織本

社の営業部にいた。それが、どこをどう見込まれたのか町田社長の一人娘澄江との間に縁組の話が起こり、あつという間に事がまとまった。

五味川は一度の恋愛の経験もなく、澄江と結婚した。澄江はまだ二十三歳になったばかりの、愛くるしい娘であつた。底抜けに明るい性格で、五味川には少女のように甘えた。

そのころはまだ、町田甲太郎の一人息子が存命中だつたから、五味川も町田家に婿入りしたわけではなかつた。ただ義父母、義弟と同じ屋根の下に住むようになっただけで、五味川姓は変わらず澄江も彼のほうの籍に入つていた。

それでも、社長の一人娘と結婚したとなれば、会社における出世の道はおのずと開けるものである。この五年間のうちに、五味川は総務部の課長を経て営業部次長、そして営業部長へと栄転を重ねた。

それに伴つて、仕事も忙しくなり心身ともに重責を担うことになった。三十代で営業部長という異例の昇進、それも社長の娘と結婚したなればこそだという人の目がある。

五味川は神経をすり減らし、無理を承知で激務を続けた。その結果、彼は健康を害することになった。疲労と神経の消耗が最も影響する肝臓を悪くしたのであつた。

五味川は今年の二月、新橋の大学病院に入院して絶対安静をいい渡された。その時すでに、主な取引先の仕入部関係者をヨーロッパ旅行に招待するというスケジュールが決まつていたのである。

接待役を兼ねた招待旅行の責任者である営業部長が病氣になつたからといって、予定を中止するわけにはいかなかつた。準備はすべて完了していたし、招待客たちもそのつもりでいる。

急遽、五味川の代役を立てなければならぬということになった。その代役候補の一人にのぼり、

みずからも進んで買って出たのが妻の澄江であった。

澄江は別に、海外旅行に興味があつたわけではない。行こうと思えば、いつでも行ける身分である。それに、どうせ行くなら五味川と二人でというのが、澄江の本心であつただろう。

澄江は自分の夫が病いの床に臥したことによつて、会社に迷惑が及ぶのを恐れたのだつた。ひいては、夫が心おきなく療養に専念することができなくなるのを、憂えたのである。

正式社員ではなくても、営業部長夫人がこうした招待旅行のホステス役を勤めるのは、今日的ではないかという意見もあつて、結局は澄江が代役ということに決定した。

日本を発つ前日、五味川は病院のベッドの上で澄江と握手を交した。澄江は元氣そのもので、終始屈託のない笑顔でいた。その時の濡れたように赤い唇が、五味川の印象に残っている。

「羽田へも、見送りに行けないで……」

「いいのよ。わたしは、あなたの代わりに行くんですもの。わたしはあなた。あなたが自分を見送る必要なんて、ないはずよ」

「氣をつけてな」

「あなたもよ。わたしが帰つて来るまでに、退院っていうのは無理でしょうけど、せめて快方に向かつてくれてなくちゃあ……」

「大丈夫だよ」

「毎日、お手紙書くわね。でも、たった二十日間じゃあ別れている妻からの手紙っていう感じが、しないかもしれない」

長い接吻だつた。五味川が肩を押しやるまで、澄江は顔を離そうとはしなかった。普段、接吻には

淡泊だった彼女にしては、珍しいことだった。いまになれば、虫が知らせたのだとも考えなくなる。

「じゃあ……」

ハンカチで五味川の唇の口紅を拭い取ってから、澄江は右手を差し出した。それを、五味川も軽く握った。暖かい手をしていた。

彼女は、微笑を浮かべながら病室のドアの外へ消えた。それを見送りながら、澄江もたくましい女になったものだ、五味川はひとり頷いた。この時、妻も二十八歳になったのだと澄江の年を数えたのを憶えている。

まるで、関西あたりへ出かけて行くような気軽さで、澄江は五味川に別れを告げた。だが、それが永遠の別離になったのである。五味川には、暖かい掌の感触だけを残して――。

翌四月二日、十六名の招待客に同行して三人の営業部員とともに澄江は、北回り日航機でヨーロッパへ向かった。コペンハーゲン、ロンドン、パリを経てスペインのマドリードまでは、予定通りの順調な旅だったらしい。

そして四月十二日、五味川は病院で『澄江死す』の知らせを受け取ったのである。更に二日後、澄江はマドリード郊外で殺されたのだという詳細が入った。

殺されたというのは、物理的根拠によるものではない。マドリードの警察でも、殺人とは公表していなかった。死因は薬物で、どうやら青酸化合物入りのブドウ酒を飲んだらしいということだった。死体が発見されたのは、現地時間で四月十一日の夜九時、死亡して間もなくであった。宿舎のヒルトン・ホテルから姿を消して、六時間後のことである。

場所はマドリードの南郊バラハの空港にほど近い林の中であった。外傷はなく、所持品には手づ

かずであつた。死体に抵抗のあとはなく、暴行凌辱された形跡もなかった。

もちろん、その後犯人が逮捕されたという知らせは入っていない。一見、自殺したというふうにも受け取れる。しかし、それは死体の状況から出された判断にすぎない。

澄江に、自殺を計る理由はない。日本にいてもしかり、まして外国にまで行って死ななければならぬような事情は、考えるに考えようがなかった。

自殺でなければ、他殺しかない。澄江は明らかに殺されたのである。とすれば、当然疑われるのは、澄江とともに今度の海外旅行に出かけた十九人の日本人たちであつた。

ところが、丸甲毛織の営業部員三人、招待客十六人ともに、この事件に関わり合ひはなかったのである。彼らには、はっきりしたアリバイがあつた。

四月のマドリードは、雨が多い。この日も雨が降っていた。一行は午前中だけで観光めぐりをやめて、午後からはずっと宿舎のヒルトン・ホテルに引きこもっていたのだ。

夜はホテルで会食をやり、澄江の死の知らせがあるまで席をはずした者はひとりもいなかった。つまり、この日澄江だけが午後になって、ホテルを出たことになる。

澄江は営業部員のひとりに、買物に行くといひ置いて出かけたらしい。だが、彼女がどこへ何を買ひに出かけたのかということになると、知っている者は誰もいない。

ホテルで、車も呼んではいなかった。ホテルを出てからは、ひとり傘をさして歩いたようである。しかし、その後の澄江の足どりはまったくつかめていなかった。

雨の中に消えてから、マドリードの南の郊外バラハの空港近くの林の中で死体となって見つかるまでの間に、六時間以上の空白がある。だがその間、異国では目立つはずの日本女性が、誰の目にも

触れていないのだ。

いずれにしても、澄江はマドリードの雨にうたれながら死んだのである。五味川の手元には、四枚の絵葉書だけが残った。旅先から澄江が寄越した、簡単な便りであった。

毎日手紙を書くという約束は守られなかった。ホステス役としては、忙しくてとてもそんな暇はないと初めから五味川は分かっていたので、あまりアテにはしていなかった。

それでも、ロンドンとパリから、絵葉書が届いた。いずれも絵葉書に書くのがやつとらしく、ほんの六、七行、お元氣かしら、さよならといった具合の文面だった。

もう二枚は、スペインのマドリードからだった。日付によると、四月十日に二枚一緒に書いて送ったようである。殺される前日に書いたその手紙は、皮肉にも澄江の死を知らされてから五味川の手許に届いている。

五味川は、すぐにでもマドリードへ飛んで行きたかった。だが、主治医の許可がおりなかった。彼の入院生活は更に二か月、六月中旬まで続いたのである。

甲太郎夫妻も、スペイン行きを断念しなければならなかった。不断から高血圧で要注意とされていた絹代が、澄江死すの知らせを聞いて倒れたからであった。

さいわい、絹代の容態は大したことはなかった。しかも、甲太郎がいなくなることを、しきりに心細がった。甲太郎は自分の代わりに同じ丸甲毛織の常務をしている弟を、マドリードへやった。

すべて、人任せであった。それだけに、一層澄江の死を信じられなかった。澄江はまだ、どこかで生きている。死んだのは澄江によく似た別人だというのが、三人に共通した希望的観測であった。

だが、そんな希望の見方が、期待通りに叶えられるはずはなかった。死体とその顔を、三人の営業